

づれの御時にか、女御、更衣あまたゞぶらひたまひけらなかに、いとやむごことなき際にはあらねが、すぐれて時めきたまふありけり。はじめより我はと思ひ上がりたまへる御方がた、わざましまゝものにおとしめ娘みたまふ。同じほど、それより下臍の更衣たちは、ましてやすからず。朝夕の宮仕へにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふ積もりにやありけむ、いと篤しくなりゆき、もの心細げに里がらなるを、よ、よあがずあはれるものに思ほして、人のそしりをもえ憚らせたまばす。世のためにもなりぬべし御もてなしなり。上達部、上人なども、あいなく目を側めつゝ、とまばゆき人の御おぼえなり。唐土にも、かかる事の起りにこそ、世も乱れ、悪しかりけれ」と、やうやう天の下にもあぢきなう、人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でづくなりゆくに、いとはしたなきこと多くれど、かたじけなき御心ばのたゞひなきを頼みにてまじらひたまふ。父の大納言はそくなりて、母北の方なむに一への人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方がたにも、たう劣らず、おしづかれたまふあまりに、さらべき御遊びの折々、何事にもゆゑあら事のふしぶしには、まづ參う上らせたまふ。あら時には大殿籠もり過ぐして、やがてさぶらはせたまひなど、あながちに御前去らすもてなさせたまひしは、おのづから軽き方にも見えしを、この御子生まれたまひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にも、まづはさせたまふあまりに、さるべき御遊びの折々、何事にもゆゑあら事のふしぶしには、まづ參う上らせたまふ。御腹にて、寄せ重く、疑ひなき儲の君と、世にものてかしづきこゆれど、この御にほひには並びたまふもあらざりければ、おほかたのやむことなき御思ひにて、この君をば、私物に思ほしかしづきたまふこと限りなし。初めよりおしなべての上官仕へたまふに際にはあらざりき。おぼえ、とやむことなく、上衆わかしけれど、わりなくようせずは、この御子の居たまふゞなめりと、の皇子の女御は思し疑へり。人より先に參りたまひて、やむことなまふ。さう御思ひなべてならず、皇女たちなどもおはしませば、この御方の御諫めをのみぞ、なほわづらはしう心苦し、う思ひなこえさせたまひて、ひまなき御前渡りに、人の御心を尽くしてたまふも、げにことわりと見えたり。参う上りたまふにも、あまりうちしかる折々は、打橋、渡殿のことかこの道に、あやしきわざくを一つ、御送り迎への人の衣の裾、堪へがたく、まさなきこともあり。またある時には、え避らぬ馬道の戻を鎖し、これ、こなたかなた心を含はせて、はしたなれわづらはせたまふ時も多かり。事にふれて数知らず苦しまことのみまさは、いとたゞ思ひわびたらき、いとあはれと御覽じて、後涼殿にもとよりさぶらひたまふ更衣の曹司を他に移させたまひて、上局に賜はす。その恨みましてやらむ方なし。この御子三つになりたまふ年、御袴着のことの宮のたてまつりしにあらず、内蔵寮、納殿の物を尽くして、みじうせさせたまふ。それにつけても、世の誹りのみ多かれど、この御子のおよびもておはする御容貌心ばへありがたくわづらしまで見えたまふを、え嫌みあへたまばす。もの心知りたまふ人は、「かかる人も世に出でおはするものなりけり」と、あさましきまで目をおどかしたまふ。その年の夏、御息所はかなき、心地にわづらひて、まかでなむといたまふを、暇さらに許させたまばす。年ごろ、常の篤しさになりたまへれば、御目馴れて、「なほしはしころみよ」とのみのたまはするに、日々に重りたまひて、ただ五六日のほどにいと弱うなれば、母君泣く泣く奏して、まかでさせたてまつりたまふ。かかる折にも、あらまじき恥もこそと心づかひして、御子をば留めたてまつりて、忍びてぞ出でたまふ。限りあれば、そのみもえ留めさせたまばす、御覽じだに送らぬおぼつかなきを、言ふ方なく思ほさる。ひとにほひやかにうつくしげなる人の、たゞ面瘦せて、いとあはれとのものを思ひしみながら、言ひ出でても聞こえやらず、あらかなきかに消え入りつものしたまふを御覽するに、來し方行く末思し召されず、よろづのことを泣く泣く契りのたまはすれど、御いらへもえ聞こえたまばす、まみなどもいとたゆげにて、いどとなよなよと、我がの氣色にて臥したれば、かさまにと思ひ召しまどはる。輦車の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひて、さらにもえ許させたまばす。「限りあらむ道にも、後れ先立たじと、契らせたまひるを。せりとも、うち捨てては、え行きやらい」とのたまはするを、女もいとみじと、見たてまつりて、「限りとぞ別らる道の悲しきに、かまほしきは命なりけり」とかく思ひたまへましかば」と、息も絶えつゝ、聞こえまほしけなきことはありげなれど、いと若しげにたゆげなれば、かくながら、ともかくもならむを御覽じはておと思ひ召すに、「今日始むべき祈りども、さらべき人びとうけたまはれり、今宵より」と、聞こえ急がせば、わりなく思ほしながらまかでさせたまふ。御胸つとふたがりて、つゆまどろまげず、明かしかねさせたまふ。御使の行き交ふほどもなきに、なほいぶせきを限りなくのたまはせつるを、「夜半うち過ぐるほどになむ、絶えはてまひねら」とて泣き騒げば、御使もいとあへなくて帰り参りぬ。聞こし刀口す御心まだひ、何

